

O・B・O・Gの職場探訪

法務省入国管理局

米山毅

さん (1998年法学部卒)

訪れたのは、東京・霞が関に構える中央省庁の一つ、法務省。重厚な建物群に圧倒され、緊張が高まるなか、法務省の厳重な警備体制に更に緊張が増していった。

形にこだわらないファッション
ネーミングで仕事を判断しない

法務省に入り、待ち合わせの場所に現れた米山さんは、スレンダーな体型で、ストライプのワイシャツ、細見のパンツを着こなし、一見、公務員なのかと見間違えてしまうほど、おしやれな人であった。メガネをかけて、黒いスーツをピシッときめている—という公務員に対し記者が勝手に描いていたイメージが崩れ、緊張感もいつの間にか解けていった。

米山さんは、1998年に中央大学法学部法律



米山毅さん

学科を卒業し、国家公務員1種試験に合格し、法務省に入省、現在は入国管理局入国在留課審査総括係長の職にある。

大学時代は、ラグビー、スキーなどスポーツに興じる一方、行政研究会に所属、大学3年からは

資格予備校にも通い、公務員を目指した。大学を卒業した年に国家公務員1種試験に合格した。

公務員を目指すにあたって、キャリアセンターを活用し、国家公務員の先輩の生の声を聞き、自分が目指している職業を実際に自分の目で確かめることに努めた。結果、「ネーミングだけでその仕事を判断せずに、深掘りできました」という。例えば、学生は『外交』を扱う業務に就きたいというとき、外務省を真っ先に思い浮かべると思いますが、他の省でも、外交に関する業務に携わることは可能、ということを知る」ことも多かった。

「治安」に高校時代から関心
官庁訪問で法務省に決める

国家公務員1種試験に合格してもすぐに国家公務員になれるわけではない。「官庁訪問」と呼ばれる各省庁の面接を突破しなければ採用されないのだ。

もともと「高校生の頃から日本の治安に興味があった。特に、犯罪の起きない社会、つくりと言ったような政策への関心が強かった」という。特にその思いを強くしたのは学生時代に一番衝撃を受けた、1997年(平成9年)5月の神戸市連続児童殺傷事件だった。犯人が普通の中学生だったことに、「学校でみんな、同じように教育されて

いるにも関わらず、何故、事件が起きたのか」と強い衝撃を受けた。1995年にはじまった「ゆとり教育」の弊害とも考え、このような問題を解決するには、単に治安対策と言うだけでなく「教育」が大事と考え、「警察庁」や「法務省」以外に「文部科学省」を志望した。

だが、法務省を訪問した際、実際に働いている人の話しを聞き、法務省、特に入管政策に興味を持つようになった。「法務省では、自分の意見をよく聞いてくれた」ことも法務省に入る大きな一因になった。

官庁訪問の際には、「新聞に頻繁に目を通し、アンテナをはって、情報収集に努め、どういうことが話題になっているのか、考えるようにした」という。「自分の進路の動機付けがきちんとできていれば、辛い事があっても、仕事を簡単にやめる事はありません」と米山さんは断言する。



“お役人”にはみえないおしゃれな米山さん

法務省入省以来、米山さんは、これまでに多くの仕事に携わってきた。入省後、入国管理局、大臣官房訟務部門では原爆症、在日韓国朝鮮訴訟などの厚生労働訴訟に携わり、東京入国管理局の現場では日本人と結婚した外国人の審査業務を行った。外務省や厚生労働省に出向したこともある。厚生省では、外国人雇用対策業務に関わり、フィリピンやタ



入管業務で犯罪の未然防止に取り組む

外国人雇用対策にも関わる 入国管理業務は「アメとムチ」

イなどの経済連携協定（EPA）交渉における外国人看護師や介護士を受け入れる政策に関わった。

入国管理局の仕事については、『アメとムチ』のメリハリが大事です」という。「優秀な外国人にどんどん入って来てもらい、長く留まってもらいたい。だが一方で悪い人にどのように対処するのか。そのような人が入国しないようにするにはどうすればいいか。すでに入国している場合は、どうしたら未然に犯罪を防止できるか、などを考える。在留管理は日本の将来にも深く関わります」と強調する。

日本をどうするか、を考える
国家公務員の仕事に誇り

米山さんは、「国家公務員の仕事は、日本の国をどうするかを考えるチャンスが多い。強い志があれば、仕事上大変なこともあるが、それ以上のやりがいを見つけることができる」と国家公務員の仕事に誇りをもって取り組んでいる。

「興味を持ったなら実際、働いている方に話を聞いてみるのがいいですね」。米山さんもまた国家公務員に興味がある後輩たちに、喜んで話をすることを約束してくれた。

（学生記者 梶原麗奈Ⅱ法学部2年）